

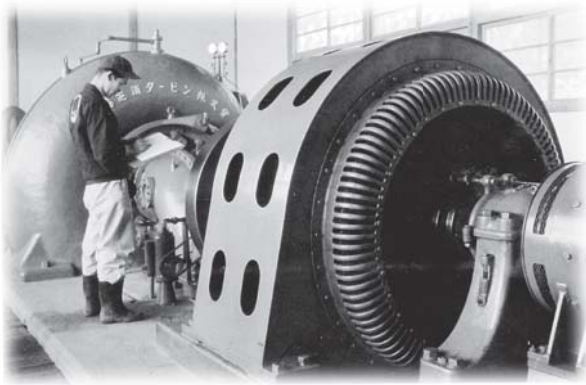
受益面積百九〇分の田植えに間に合わせることでできた。その後、発電所の本体工事に着手し、平根発電所（最大出力五五〇キロワット）は翌年に稼働した。

このように、平根自家発電所の完成は、森泉村長の忍耐強い努力とリーダーシップのもとで、それに応えた村民の村振興への強い願いがあったからと言える。

●地産・地消の自家発電で地域振興

自家発電の電力は、新設された平根農協電線工場、プラスチック工場、学校給食を中心に一日約七千個ものパンを製造した工場などで主に使用した。佐久地域には工場が少なかつたので、これらの工場ができたことにより村

外を含めて多くの若者が従業員として採用された。なお、平根農協電線工場は、後に三映電子㈱の平根工場として移管された。



建設当初のタービンと発電機（現在も稼働中）
1955（昭和30）年 森泉一成氏蔵

平根発電所の建設は全国でも注目されるようになり、日本文科学会により詳しい調査が行われた。また、学習研究社の小学生向け月刊誌「三年の学習」一九五七（昭和32）年三月号では、平根発電所により村が豊かになったと紹介された。

福島原発事故後、自然エネルギーを利用した水力発電の重要性が注目されるようになり、二〇二二（平成24）年、これまでJA佐久浅間が所有していた発電所を佐久市が取得し運営することとなった。発電された電力は平尾山公園で利用され、残りは売電している。

●「浅間総合病院」の開設

一九五四（昭和29）年、合併により浅間町（現佐久市）が発足すると、助役となった森泉は、北佐久郡地域の基幹病院となる現在の佐久市立国保浅間総合病院開設に中心的役割を果たした。

当初は地元医師会の賛同が得られず、県の医療機関整備審議会は結論を出さなかつた。森泉は決死の覚悟で県の部長に対し「北佐久郡民挙げての切望が、少数意見のためによろめくような県政なら、直訴手段を取ってでも県に踏み切らせる」と言い寄った。

その後、同審議会は前向きな答申を行い、浅間病院組合と地元医師会との間でも協定書が調印され、一九五八（昭和33）年に浅間病院開設の許可が得られた。

●東京大学医学部への医師派遣依頼

森泉は理想的な国保総合病院の創設を願い、東大に医師派遣を依頼するため何度も上京した。妻きよのによくと、革靴を何足か履きつぶすほど上京を繰り返したが、当初は教授に会うことさえもできなかった。

それでも諦めずに医師派遣を懇願し続けると、その熱意が通じたのか、ある日、医局長から「沖中教授が面会して下さる」との親書が届いた。この時、森泉は小躍りして喜んだという。

沖中教授が医師派遣の条件として、病院の医療設備を高度にし、医師が働きやすい環境を整えられるか問いかけると、森泉は「月の世界にあるものならいざ知らず、地球上にある物なら何としても整えます」と答え、補助金の対象外だった機器の購入を即決した。こうして浅間病院は一九五九（昭和34）年に、東京大学医学部より吉沢國雄院長を迎え、一般病床二〇床で開院した。現在の総病床数は三三三床である。

（森泉昭治）

参考文献

日本文科学会編『ダム建設の社会的影響』第三章

農村電化をめぐる諸問題 東京大学出版会

「三年の学習」学習研究社

『国保佐久市立浅間総合病院開院一五周年記念誌』

佐久市立国保浅間総合病院

佐久の先人たち③①

平根発電所と浅間病院 の創設に貢献した

もり いずみ たけ しげ

森泉武重

(1903~1988年)



農業用水路を利用した自家水力発電所を建設し農村電化を促進すると共に、村内に工場を誘致して村の活性化を実現した。また、国保浅間病院創設のため、東京大学に医師派遣をねばり強く懇願し、その実現に貢献した。

●自家水力発電所建設の構想

森泉武重は田畑で一畝強の耕作のほか、産卵鶏の多頭飼育、自家産大豆を原料にした蔵寒期の豆腐（しけり）などの複合経営を行う村内きっての精農家（せいのうか）であった。

一九四七（昭和22）年、農村建設連盟の後援を受け、初の公選村長に当選した森泉は、次々に積極的な村政を進めた。特筆すべきは平根発電所の建設である。

一六五二（承応元）年に平尾氏（ひらお）によってつくられた平尾用水は、断崖絶壁を貫く難所も含め、総延長約六キロメートルに及び、素掘り（すほり）のため毎年その補修作業に、村民

は大変な苦勞を強いられてきた。村長となった森泉は、三〇〇年来の大仕事となる用水の改良をまず計画し、さらに用水改良を機に、農村の振興策としてその水路を併用した水力発電所建設の構想も描いていた。

平尾用水改良工事の起債（きさい）が一九五三（昭和28）年に許可されると、同年一月に自家水力発電所建設の決定を行い、農業用と発電用を兼ねた水路改良工事に着手することになった。



人力による発電所導水管の工事
1954（昭和29）年 森泉一成氏蔵

●困難を乗り越え村総動員体制で

しかし、いくつかの困難があった。①農業用水を発電用にも利用することによる灌漑（かんがい）への影響②村財政の長期借入と起債等に対する村民の不安③三井村（現佐

久市）、伍賀村（現御代田町）等の水利許可が必要であること④電気事業を、村営や農業協同組合で行うことに対する通産省や電力会社の抵抗：等。これらに対して、森泉は自ら多数の陳情書・申請書類を書きあげ、粘り強い信念を持ち続けて乗り越えていった。



落差33mの平根発電所
森泉一成氏蔵

また平根農協の役員（組合長：榎沢徳太郎、専務：森泉丑之助）等も資金の獲得などの協力体制を敷き、村当局者をバックアップした。水路改良工事は各戸からの勤勞奉仕、青年団の無料奉仕、さらに村の中学生までが動員されて村民総動員体制が取られた。その結果、一九五四（昭和29）年五月三日に竣工し、